

# まちづくり ひろしま

被爆100年(西暦2045年)の姿をめざして

第64号 (令和5年3月15日)

読者数：675名(募集中)

メール：[hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp](mailto:hirosima.idea.c@chugokuc.co.jp)

HP：<https://machizukurihiroshima.web.fc2.com/index.htm>

〒733-0002 広島市西区楠木町1-9-7

発行人：前岡智之、編集人：瀧口信二

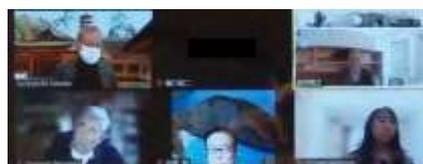
配信元：広島アイデアコンペ実行委員会

ご提案・ご意見等は、こちらまで

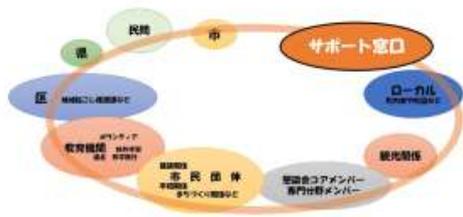
## ウクライナに平和を！平和を我らに！



○広島大旧理学部1号館  
仮称ヒロシマ平和研究教育機構設置



○仮称「移民史ミュージアムを実現する会」の学習会



○旧被服支廠の活用策  
イベント開催のサポート窓口提案



○Hiroshimaをつ・た・え・る  
基礎講座：講師 平岡 敬

## 目次

- 巻頭言：中央図書館よ、きばれ！…………… 松波計画事務所 松波龍一
- 特別寄稿1：教養＝痩せ我慢の美学…………… 音楽家 松本憲治
- ひろしまのまちづくりの動き
  - ・被爆建物の広島大旧理学部1号館に仮称ヒロシマ平和研究教育機構設置
  - ・仮称「移民史ミュージアムを実現する会」の学習会
- ほっとコーナー：頭に浮かんだ世界を「音楽」にする…作詞作曲歌手 toy (トイ)
- Hihukusho ラジオ報告：ゲスト 渡部朋子 (ANT-Hiroshima 理事長)
- 「Hiroshimaをつ・た・え・る基礎講座」報告：講師 平岡 敬 (元広島市長)
- 「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」その6…………コメント 藤原美香
- 特別寄稿2：中央図書館移転問題における隠ぺい体質…………編集委員 瀧口信二
- 編集後記：めんどいまちがいさがし……………編集委員 前岡智之

## □ 巻頭言

### 中央図書館よ、きばれ！

松波計画事務所 松波龍一



先日、思いついてヴァイツゼッカー独元大統領の演説集を読み返してみました。なかでもやはり1985年連邦議会での「荒れ野の40年」が心に響きます。「過去に目を閉ざす者は、現在にも盲目となる」という有名なフレーズを含んだ演説です。しかし驚くのは、どの演説にも具体的な政策への言及が乏しいことです。かわりに、国民がどういう姿勢を保ち、どういう価値観にもとづいてどういう意思を持つべきかということを、諄々と説いています。

ドイツといえば、旧東独出身の物理学者であったメルケル前首相の演説も、心に残るものがありました。2019年米ハーバード大学の卒業式でのスピーチ「正しいからするのか、可能だからするのか、それを繰り返し自問しつづけてほしい」という訴えは、その冷静で淡々とした語り口とともに人々の記憶に残っています。

かつて、ミュンヘン郊外の村の圃場整備を見に行った時のこと。ブッシュに覆われて曲がりくねった小川や人の出入りを排除したビオトープなどを換地で生み出した、非効率な土地利用の理由を尋ねると、事業に携わった州の技官は、欧州全土の地力保全の必要性から説き始め、したがって農地整備の目標はいかに土地の生産力を抑制するかということだと、滔々と説明してくれたのです。

ドイツ国民を十把一絡げにするつもりもないし、他の国の人々の演説にも歴史的に評価されるものがたくさんあると思いますが、少なくともこれらの言葉には、大きな正義や理想というものがどこか遠くにあるのではなく、現実の行動の規範に充分なりえるものだ、という確信が感じられます。

こんなことを言うのは、理想やそれを語る言葉に対する信頼が、今の広島で少し欠けているのではないかと思うからです。

広島は「国際平和文化都市」という立派な都市像を掲げています。それが、単なる便宜的な建前だと奉ってしまうのではなく、この都市像を真に立派なものにし、広島を世界から尊敬を集める都市にしていくためには、「国際とは何か」「平和とは何か」「文化とは何か」と不断に問い続け、それを個々の都市政策の拠り所とし、そのことを内外に発信していく必要があります。

昨年5月の市議会本会議で可決成立した「広島市平和推進基本条例」はその第2条で『『平和』とは、世界中の核兵器が廃絶され、かつ、戦争その他の武力紛争がない状態をいう』としています。私自身は、そこに「平和」についての深い洞察が見られないことに赤面してしまいました。

「平和」についての考察や研究は、これまで夥しい蓄積があるはずですし、広島市基本構想では『『平和』とは、世界中の核兵器が廃絶され、戦争がない状態の下、都市に住む人々が良好な環境で、尊厳が保たれながら人間らしい生活を送っている状態をいう』、広島市男女共同参画推進条例では「平和とは紛争や戦争のない状態だけをいうのではない。すべての人が差別や抑圧から解放されて初めて平和といえる」と定義していて、平和について私たちに深く問いかけています。平和推進基本条例は、これらの蓄積を黙殺し、そこに何ら新しい考えを追加しなかつただけでなく、平和の概念そのものを矮小化させてしまいました。

広島市中央図書館は、国際平和文化都市の「文化」を担う重要な中枢機能です。この間、その建て替え候補地についての実務的な比較検討はなされましたが、中央図書館自体のあるべき姿についての訴えは、ほとんど聞こえてきませんでした。広島にとって文化とは何なのか、DX時代の中央図書館がその高揚のためにどのような役割を果たせばよいのか、そのためにどんな課題があるのか、各区図書館やこども図書館、まんが図書館、公民館図書室など他の市立図書館との関係がどうなればよいか、といったことを熱っぽく語りかけてほしいと思います。

昨年12月に総務委員会に提出された「中央図書館の再整備候補地の比較検討について（案）」では、次のような評価がなされていました。

エールエールA館は広島駅に近いので「国内外から観光やビジネスで訪れる来訪者が広島の歴史、文化、産業等に広く触れ、興味・関心を持つことで、平和記念資料館や原爆ドームのみなら

ず、周辺の他の観光施設を訪問するきっかけとなる」「平和を願う『ヒロシマの心』の共有や、平和文化の振興に、多くの人目に触れる機会が確保できる」点で優れている。さらに、「市・JR・広島電鉄の連携により供されるパブリックスペースを有効活用したイベントの開催等の相乗効果により利用者の更なる増加が期待でき、官民連携によるにぎわいや新たな回遊性を生み出すことに繋げることができる」など。

これらの言説を読むと、中央図書館というのは観光施設なのか、賑わい施設なのか、いったい何なのかと考えてしまいます。これではまるで、無料の貸本屋を兼ねた観光案内所とみなしているようです。

中央図書館の高邁な理想にもとづくのなら、乱暴なことを言えば、それが似島にあってもよいし、白木の山の上にあってもよいと思います。もちろん、広島駅前にあってもかまいません。あるいはどこかに書庫とレファレンスがあって、中央公園に閲覧室があるといった、分散型もあるかもしれません。ただし、そのためには新しい中央図書館のありかたについて、「便利などころだからいいだろう」などという安直な説明ではなく、市民が広島の文化について大きな夢を持てるような「言葉」が必要です。

そんな精神論は青臭くて、行政のリアリズムには合わないと言うのであれば、「正しいことは何か」と問うことをしないで「可能だからやる」という風にしか見えません。これは、行政の問題ではなく、優れて政治の問題なのです。

## □ 特別寄稿 1

### 教養＝痩せ我慢の美学

音楽家 松本憲治

広島市中央図書館の移転問題が喧しい。新聞によれば「老朽化」と「利便性」を鑑み、現在の広島城そばの基町から、広島駅前商業ビル「エールエールA館」に移転するという。で、毎度のことながら広島市の街づくりの思想はどうなっているのだろう、と考える。

そもそも「図書館」、特に「地域の教養の姿勢を内外に示す中央図書館」に、浅薄な「利便性」を第一に挙げているらしいこと自体、ちょっと首を傾げる。もちろん「利便性」は大事ではある。しかし「大仰」かもしれないがわたしなぞは図書館こそ、まず優先されるのは人類の、あるいは地域の叡智を集めた図書、資料の保存、整理、そのための「本のプロ＝目利き＝司書」の充実であり、その後無料公開などの「市民の利便性」を整えるのが使命ではないか。

図書館は「今」を追いかける月刊誌、週刊誌、観光パンフレットや新刊書の世界（市民ニーズが高いと聞く）ではなく「古書」の世界。民間の商業主義に任せれば「売れなくて」散逸してしまう「地域の知」の、誇りある拠点であり、その場所は、地域の地政、歴史を踏まえた地に風格を備えて構えてほしい、と欲してしまう。

そういえば「広島市立中央図書館」は以前、「市井の広島人」である父も母もわたしも、「浅野図書館」と呼んでいた。さまざまな経緯で現在の「静謐なお城の傍」に落ち着いたらしいが、いかにも「浅野」に相応しい、と勝手に思い込んでいた。

現在の諸事情に目を向け、配慮するのは当然であるが、「目を奪われすぎ」では糸の切れたタコになってしまう。「光り輝く現在」は、追いついた途端に「見向きもされない過去」になる。「場所」もさることながら図書館機能の充実こそ、「今」も併せ同時に50年先、100年先の人材を育成するための知の殿堂であり市民の精神、また民度を深めるものと思いたい。

「利便性」「市民のニーズ」で思い出したことがある。ほとんどニーズがない資料について、これはわたしの経験。昨年春、締切まじかの原稿の根拠のために、広島県内の図書館を必死でネット検索した。公共図書館、国立公立大学図書館、全て無かったが最後の検索がヒットした！広島女学院大学図書館。休日だったが電話すると、とても素敵な対応でコピーを郵送してくれた。わたしに言わせれば、この資料（1981年1月刊行の文芸雑誌「文藝」）に関していえば広島県の図書館は広島女学院大学図書館のみが勝者。あとは全敗。それにしても、多分「ほとんど読まれないもの」をよく収蔵していたなあ。「正しい目利き」がいたのだろう。

ついでにもう一つ。これはわたしの記憶だけで恐縮だが、若い頃ある作家（吉行淳之介）のエッセイを読んでいたら、「ある人（作家）が、自分の小説の1行の根拠のために、さまざまな図書館を探った。最後に訪ねた図書館の奥まった書架にようやくそれを見つけた。その本の裏を見ると、彼の前にその本を借りた人は40年前ただ1回きりだった」という内容。これを読んだ時、20代半ばのわたしも図書館ってスゲーな、と、ちょっと興奮したことを覚えている。

とはいえこの度の中央図書館移転について、「聡明なる」市の判断は、単に「浅薄な利便性」や予想される「経費削減」「費用対効果」ではなく、新聞報道以外にわたしなぞには思いもよらない広く深いさまざまなファクターを勘案した後の、「素晴らしい決断」あるいは「苦渋の決断」なのだろう。駅ビル図書館の先行例としては、東京、武蔵小杉駅にある川崎市立中原図書館があるらしいし、報道によれば市民も利便性を好感していると聞く。ただ個人的にはやはり「浅野図書館」にふさわしく思える、静かな今の地であってほしいが、実はそれよりも優先されるのは上記に書いた「司書の充実」である。

そういえば地域の「文化芸術ホール事業」も図書館と似た扱いを受けているようだ。これに国はいわゆる「劇場法」と言われる「劇場、音楽堂等の活性化に関する法律」を平成27年に制定した。その前文にこうある。

（前略）国及び地方公共団体が劇場、音楽堂等に関する施策を講ずるに当たっては、短期的な経済効率性を一律に求めるのではなく、長期的かつ継続的に行うよう配慮する必要がある。

この背景は、やたらに数字を追いかける（観客動員）のは、商業主義的な民間の業者に任せ、文化行政ができることは商業的ではない「地域市民の民度を深めるために真に必要なコンサート」である。とはいえ現場の担当者たちは数字だけを見る上司や議員に相変わらず追いまわっていると聞く。「千人しか入らなかったのか」と「100人も入ったのか」という事業を見分ける目利きがやはり必要なのである。

「人はパンで生きる」という前提の後「人はパンのみにて生きるにあらず」という美学が出てくる（藤原正彦）のは当然だろう。美学こそ「武士は食わねど」の痩せ我慢。この痩せ我慢が50年、100年先の市民の精神的教養と誇りの源となる。美学のみではメシは食えないが、美学が無いと人に誇りは無い。

## ひろしまのまちづくりの動き

### ① 被爆建物の広島大旧理学部1号館に仮称ヒロシマ平和研究教育機構設置！

広島市、広島大学、広島市立大学、広島平和文化センターの4者が1月25日に連携協定を結び、広島大本部跡地にある被爆建物の広島大旧理学部1号館を拠点とした仮称「ヒロシマ平和研究教育機構」を2023年度内に開設することを発表。

機構の活動としては、平和に関する共同研究・教育、被爆の実態の学術的な分析と世界への発信を掲げている。具体として、被爆体験の継承や核兵器廃絶、ウクライナ情勢などをテーマとした共同研究や国内外の若手研究者の受け入れ、原爆放射線医科学研究所の被爆関係資料の展示や広島平和記念資料館のデータベースの活用など。

市は2017年に1号館の正面の棟をI字型に残し、耐震改修費を概算18億5千万円と見込む。今年度、コンサルに委託して補修方法や費用、保存範囲・平面計画（案）等を検討中。来年度に研究内容や保存方法等をまとめた基本計画を策定し、24年度に基本設計に着手予定。

### ② 仮称「移民史ミュージアムを実現する会」の学習会！

広島市は1980年代に移民の歴史を展示するための資料約8,400点を海外の移住者から集め、今も保管している。被服支廠の保存活用の動きの中で、その移民資料を被服支廠の倉庫に展示できないか検討するため市民グループ、仮称「移民史ミュージアムを実現する会」（事務局担当：田



中勝邦) 設立を昨年春に呼びかけ、原則として毎月1回の学習会を開催。

メンバーはハワイやカナダ他の移民史研究者や郷土史研究者、移民との関わりが深い人など10数名で定期的に集まり、これから1年かけて具体的な提言をまとめていく。

1月の学習会では、講師に建築家でまちづくりにも造詣の深い前岡智之氏を迎え、参加した県主催「旧被服支廠の活用を考えるワークショップ」の内容や広島のみちづくりへの思い等の紹介を交えながら意見交換をする。

事務局からは移民資料展示に対する県や市のスタンスや市が移民資料を集めた経緯と現状の紹介がある。県としては広島近代史を紹介するコーナーの一部として移民史を紹介する程度の考えしか持っていない。市は放影研の広大医学部への移転が決まったので、放影研移転跡地の比治山の平和の丘構想の中で建設することを想定している。

移民史ミュージアムの設置場所を被服支廠にするか、元々の市の博物館構想があった比治山にするか、早急に方針を絞るべきという意見で一致。

対象とする移民の定義を明確にし、官制移民の実態を把握し、移民史ミュージアムのコンセプトを固めることを今後の課題とする。

## □ ほっとコーナー

### 頭に浮かんだ世界を「音楽」にする

管理栄養士シンガーソングライター toy (トイ)

皆さん、初めまして。私は広島を拠点に活動している「管理栄養士シンガーソングライター」の『toy(トイ)』と申します。

管理栄養士の資格を持ち働く傍ら、シンガーソングライターとして曲を作り歌っています。絵本のような曲もあれば、鬱憤を晴らすような曲もあり、妖艶な大人の曲やシティポップ、明るく元気な曲、落ち着いたバラード、管理栄養士らしい曲…と、様々な世界を歌にしています。

曲の主人公は人間だけでなく、ハトやぬいぐるみ、はたまたサラダまで、あらゆるものの視点から描いています。

私は幼い頃から、頭に描いた世界を“形”にすることが好きでした。小学生の頃は図工が得意で、「好きなお家」を作る授業では、3階建てで屋上にプールがあるアヒル兄弟のお家を作り、周りから好評を得ました。

中学3年間は吹奏楽部に所属し、クラリネットに情熱を注ぎました。課題曲を聴いて浮かんだ情景を絵に描き、物語を作り、それを「部活ノート」に書いて提出していました。顧問の先生から、映画を見ているようで楽しかったと言われました。

高校、大学では軽音部に所属し、バンドを組んで人前で歌うようになりました。幼少期からカラオケに通うほど歌うことが大好きだった私は、大勢の前で歌う楽しさにはまっていきました。

大学3年生の秋、初めての曲作りに挑戦しました。始めたばかりのギターで指もうまく押さえられないまま、自分の気持ちを音楽にしました。これがシンガーソングライターとしての始まりでした。

曲を作り始めると、広島の色んなライブハウスに呼んでもらえるようになり、ライブに出るようになりました。アーティスト仲間もでき、いつしか応援してくれるお客さんもできました。

最近では映画の主題歌を作らせて頂いたり、バンドをしたりと、人と一緒に音楽を作る機会が増え、音楽の表現の幅が広がっています。

私の音楽は、すべての人に受け入れられるとは思っていません。音楽は好みがあるからです。その中でも、私の歌の世界を好きだと言ってくれる方がいて、必要としてくれる方がいます。とても幸せなことで、私の生きがいになっています。

これからも、“私らしく”、私の世界を「音楽」にしていきたいです。どこかで私を見かけた際には、ぜひ、私の音楽に耳を傾けて頂けたら嬉しいです。



○活動の情報は主に SNS で発信しています！Twitter、Instagram➡(@toymusiccc)

○YouTube にオリジナル曲を載せています！「toy のうたチャンネル」で検索してみてください。

## ○ 「Hihukusho ラジオ (第59回) 2022.11.30 (\*リンク参照)」 報告

2020年6月より月2回、1時間程度、旧陸軍被服支廠を題材としたラジオ番組「[Hihukusho ラジオ](#) (\*リンク参照)」をインターネット配信。これまで被服支廠の保存の動きに関わりのある人や関心のある人が登場している。今号は第59回目の渡部さんの発言の要点を紹介する。

ナビゲーター：土屋時子 (広島文学資料保存の会代表)

ゲスト：渡部朋子 (NPO 法人 ANT-Hiroshima 理事長)

インタビュアー：土屋時子



### —谷本清平和賞受賞—

昨年11月に谷本清平和賞を受賞。この賞は、ヒロシマ・ピース・センターが世界平和の実現に向けて活動する個人や団体に授与するもの。渡部さんは、スタッフみんなでいただいたものであり、これからも頑張りなさいという激励と受け止めている。

### —生い立ちなど—

1953年、広島市生まれ・育ち、被爆2世。修道大学商学部の20歳の時に広島との出会いがあり、被爆時に何があり、何を意味するのかを考えるようになった。

きっかけは、かわいがってくれた母方の祖父(入市被爆)を身近に看取り、死をどう受け止めたらよいか考えたこと。両親は被爆の体験を一切語らなかつたので、広島で何が起きたのか自分で探し始めた。

卒論に被爆の実相「ヒロシマ」をテーマに選び、中野清一先生の指導を請う。中野先生は「原爆孤児の会」、「歩みの会」を主宰し、親代わりになって原爆孤児の世話をされた方。歩みの会のモットーは「仲間と共に大地を這(は)う」である。

### —NPO 法人 ANT-Hiroshima—

29歳の時、夫が法律事務所を開設。その事務局長を務める傍ら、20歳の時の思いが叶えられる場所を探したが、見当たらないので「アジアの友と手をつなぐ市民の会」という小さな市民団体を立ち上げた。まずはアジアの留学生や修学生の生活支援から始める。

名前が長いのでローマ字に変換して頭文字をとり「ANT」(アリ)と命名。もう一つの意味「Asian Network of Trust」(アジアの信頼のネットワーク)が込められている。

ANTは仲間と共にアリののように大地を這い、アリの眼差しを大事にして、時々大空を仰ぎながら。目標は大きく世界の一人一人の平和作り。

パキスタンの友人から「トモコは、ノー・パワー(権力)、ノー・マネー(金力)、オンリー・ビッグ・ハート」と言われ、うれしかった。信頼関係のある人と人とのつながりを大事にして、金がなければ時間を味方にしてやり遂げればよい。

2002年にパキスタンにあるアフガニスタン難民キャンプに行き、苦節7年で小さなクリニックを作り、今では地域の中核病院になっている。そこに亡くなられた中村哲先生がおられ、師と仰ぐ。中村先生の教えも、「最も苦しい人、最も貧しい人の眼差しで世界を見て、共に働き、共に食べ、共に笑うこと」と学ぶ。

2005年のカシミール地震の時も、救援要請がきて広島の若い仲間と一緒に復興支援に参加。サダコの絵本を届け、パキスタンのアーティストと協力して現地で絵本を出版。そのご縁で現地の人がサダコ・プライマリー・スクールを作り、NGOのサダコ・ファンデーションもある。

### —大事にしていること—

20歳の時以来、多くの人に出会い、多くの人が亡くなられた。その人たちとの約束はフォーエバーである。特に亡くなられた被爆者の方々、岡田恵美子さんや最近ではイ・ジョングさんのメッセージは約束としてこれからも守っていききたい。

生きたいという言葉すら言えないで命を奪われた多くの人たちが広島の地下に眠られている。迷ったときにはいつも、どうしたら眠られている被爆者たちに喜んでもらえるか、どうであれば亡くなられた方の死の意味を伝えることができるか、考えるときの指針としている。

### —ひろしまのまちづくり—

広島を歩けば、いたるところで平和が体現できるまちであって欲しい。広島歴史(島があり、海を埋めて城下町を作り、軍都となり、戦時下で被爆して壊滅し、そこから市民が復興に立ち上がり、非暴力による平和を目指す)を感じられるまちであって欲しい。

丹下さんの平和の軸線のアイデアも大事にして欲しい。原爆ドームの北側は未来が窺える場所であり、南側は死者を悼み、被爆者たちの声や記録を残して記憶を伝えるところである。

広島は川に恵まれ、戦後復興で川辺が緑化され、海があり、空があり、山の稜線が見えたのに、なぜそれを隠す。人は自然から切り離されては生きていけない。平和を体現するためには、自然と共生していく私たちという視点がなくてはいけない。

今の広島市は賑わいばかりに熱心だが、人を呼び寄せるのは高いビルがあるからではない。人に会って、その土地に触れて、その土地の恵みをいただいて、アァまた来ようと思わせる魅力である。

今、一番欠けているのはランドデザインがないことだ。地元の人ではなく外部の人が勝手に儲かるだろう、にぎわうだろうと提案したものを十分に吟味することなく、バラバラに採用している。まちづくりの思想がなく、一番大切なヒロシマの心が皆無である。

今の状況は残念だが、まちは続いていくので、あきらめずにこれからも変えていく努力は市民がしていかなければいけない。市民の力は弱いけど、時間を味方にしてしぶとく、息長く、変えていく。時間を味方にするとは、幅広い世代が一緒になって取り組むこと。

ランドデザインも行政の限られた時間の中で決めるのではなく、市民の間で十分な時間をかけて議論し、市民の合意形成を図りながら一つずつ形にしていくプロセスが大事。

### —被服支廠の保存・活用について—

記憶を引き継ぐためには記録が必要であり、被爆の記録が無くなれば被爆の実相を伝えることができない。原爆関係の資料は市民や県民のみならず人類のために必要なものだが、原爆資料館や公文書館などの保管場所は不足気味である。その保管場所として最も適しているのが被服支廠と思う。倉庫として作られた頑丈な建物だし、今の建築技術で内側により安全性の高い箱モノを作ることが可能である。

被服支廠の場所も大事で、全焼した爆心地から半径2 kmに位置し、避難と救援の人たちが出会った悲惨の極みの場所でもある。

しかし、保管するだけではだめで、原爆資料館など他の施設と連携して管理・運用を図っていく。そのためには資金が必要であり、国の予算を確保すべき。市と県と国に請願を重ね、学識経験者等にも入ってもらって活用策の検討を進めていく。

ここでも保存・活用のランドデザインが必要である。ヨハネ・パウロが来広した時に、「広島を考えることは、核戦争を拒否することであり、平和に対して責任を持つこと」と語ったが、広島市民であることは平和に責任があると思う。そういうスタンスで被服支廠の活用について考えていくべきと思う。

### —個人的アイデア—

被服支廠倉庫は4棟あるので、全部を資料の保管場所にするのではなく、生きている広島が感じられるアートや文学や音楽などが楽しめる空間も必要。

被爆樹木からも多くのことを学んできたので、被爆したのは人間だけでなく多くの生き物であり、人と自然の共生社会やSDGsを大事にするという思いが届く空間もあって欲しい。

今、コロナやウクライナ軍事侵攻など大変な時代に生きているので、社会を変えていきたいという人たちが集い、語り合い、最後は笑い合って、「また会いましょう」と言って別れる「またね」の場所、「またね」のまちになればよい。

### \*コメント\*

このラジオを聞いて、こんな人が市長になればいいのでは！と思った。広島のみちへの深い愛情と平和に対する真摯な姿勢、ヒロシマの心を持った人である。

(編集委員 瀧口信二)

#### □ 編集委員の通谷 章さんからのお知らせ

通谷さんがリーダーのアマチュアバンド「キャップテンバンド」が、3年ぶりに復活しました。是非、ご参加を！！

- ・日 時：2023年3月17日（金）18：30～20：30
- ・入場料：3,000円
- ・会 場：Live Juke（クリスタルビル 19F）

広島区中区中町8-18 電話082-249-1930



## ○ 『Hiroshima をつ・た・え・る基礎講座』 報告

テーマ：記憶と継承

講師：平岡 敬（元広島市長）

（趣旨） 私たちの住む広島は「希望のヒロシマ」の姿をしているか。被爆後 78 年目の年の初めに、平岡敬さんの人生を通して、その答えを探す。

「記憶」を伝え、「記憶」を知り、自分事に手繰り寄せる。被爆者又は戦争体験者の人生をただ伝えることだけが「継承」ではない。95 歳を迎えられた平岡敬さんを講師に迎え、「記憶と継承」についてお話しいただく。

主催：NPO 法人ワールド・フレンドシップ・センター

日時：2023 年 1 月 28 日（土）10:30～12:30

場所：合人社ウェンディひと・まちプラザ



### 新年に思う

今なおロシアのウクライナ軍事侵攻が続き、昨年末は岸田政権が国家安全保障関連 3 法案を閣議決定して敵基地攻撃能力の保有を明記するなど、軍拡への道を歩み始めたことに不愉快な思いで新年を迎えた。また年末放送の「徹子の部屋」でタレントのタモリさんが来年を予想して「新しい戦前になるのでは」と発言し、話題となる。

### 新しい戦前とは

西側の国々がプーチン大統領及びロシア非難を一方的にあおり、マスコミも不安を掻き立て、国民も同調していく姿はいつか来た道。先の世界大戦に敗れて戦争を放棄し、専守防衛を国是としてきた日本が、ロシアと中国を敵視するアメリカと歩調を合わせ、戦争ができる国、戦争をさせられる国になりつつある。

政治への信頼が失われ、将来の展望が開けず、軍備が増強され、マスメディアもブレーキが掛けられず、そのうち戦争が始まるのではという不安な状況が新しい戦前と言われる所以。

### これまでの戦前と戦中

1931 年の満州事変を契機に満州国を建国し、国際社会からつまはじきされて孤立し、1937 年の支那事変から中国戦争が始まるまでが戦前。まだ戦争の実感はあまりなく、1941 年 12 月の米英との太平洋戦争開戦で戦中意識が高まった。

私は 1927 年生まれだが、小学校に上がった時の国語の教科書に兵隊さんの話が出てきて、周辺に軍国主義の風潮が漂う。1937 年の南京陥落の時には町中が提灯行列をしてバンザイを叫んでいた。本川小学校 6 年生の時、先生に引率されて今の広銀本店前に整列し、宇品から中国大陸へ出兵する兵士たちの隊列を多くの市民と共に見送った。

アメリカとの戦争は途中から負け戦が続くが、大本営の発表は景気の良い話ばかり。治安維持法により政府批判は厳しく取り締められ、国民も非国民と呼ばれることを恐れて同調する。1944 年半ばのサイパン陥落以降は本土への空襲が始まり、戦死者も増えていく。1945 年 4 月には労働力不足を補うため中学生以上の学徒を工場や農村等に動員する。

戦争は人間の理性を狂わせ、弱者に対して略奪や強姦など残虐なことをするし、生きるためなら、戦友の肉を食ってでも生き延びようとする。戦争は絶対にしてはいけない。

### 被爆者との出会い

17 歳の時、北朝鮮の興南にある日本窒素の化学工場で学徒動員として働いているとき終戦を迎え、9 月下旬に広島に引き揚げる。国家とは何かを初めて真剣に考え始めた。大学を卒業して 1952 年に中国新聞社に入社。1960 年頃から仕事として被爆者と向き合い、国家から見捨てられた存在と気づく。被爆者の苦しみは筆舌に尽くしがたく、「ピカ（原爆）はおうたもんしかわからん」と言われ、書くことの限界を感じながらも自分なりに必死に書いた。

原爆で殺された人たちの無念さを思うと、原爆を投下したアメリカは自らの判断で謝罪すべきであり、それができて初めて核兵器廃絶の第 1 歩を踏むことができ、死者も報われる。

### 被爆の記憶と継承

戦争体験と被爆体験の記憶は加害・被害を含めて残し、継承していかなければならない。被爆の記憶は原爆ドームや被服支廠倉庫などの被爆遺跡、原爆資料館などの展示物、映画・

演劇・文学・絵画などの芸術・文化を通して伝えていくのが相応しい。若い世代には「はだしのゲン」や「夕風の街」など漫画、アニメなども有効。原爆ドームも観光資源としてだけでなく、ドームを仰いで当時の惨状を思い起こし、平和の努力を誓う場であって欲しい。

被爆体験の記憶を継承するとは8月6日の惨状を伝えるだけでなく、被爆者がその後の人生で直面した偏見や差別、行政との折衝などの困難な問題を解決する努力をしていくこと。

### 広島からの発信

5月にはG7広島サミットが開催されるが、参加国がウクライナを支援する国々なのでロシア糾弾と中国包囲網強化の場で終わってしまう恐れがある。議長国の岸田首相は広島1区選出なのだから、戦争反対と核兵器廃絶のヒロシマの心をしっかり発信する場としてほしい。

核の被害者は広島・長崎の被爆者のみならず各国の核実験や原発事故等により世界中に増えつつあり、広島・長崎は世界と連携して核被害者の救援と核廃絶に向けたアピールをより一層強く発していかなければならない。

戦争は突然起こるものではなく、平時の延長線上にあり、問題があれば戦争になる前に、国民は批判の声を上げなければいけない。戦争は教育とマスコミによって扇動されるが、平和への道を開くのも教育とマスコミである。マスコミの責任は大きいので頑張ってもらいたい。

新しい戦前にしないためにも「永遠の戦後」を求めて声を上げていきたい。

### 質疑応答（要点のみ抜粋）

- ・核兵器を禁止させるために我々にできることは？→核の残虐性を認めさせることが第一だが、その前に社会を変えていく必要があり、まずは身の回りの問題から解決していくこと。
- ・ロシアのウクライナ軍事侵攻について→マスコミによりロシアが一方向的に悪く言われているが、ロシアにも言い分がある。戦争の原因は何か、双方の声を聞いて冷静な判断が必要。
- ・若者に対してアドバイスを→戦争への道を歩んだ日本の歴史を学んでほしい。先人の話をよく聞いてしっかりした自分の考えを持ってほしい。
- ・教育現場からの戦争反対の働きかけは？→誰も保身の思いがあり、権力に立ち向かうのは勇気がいる。一人では厳しい場合は、仲間を作って一緒に戦うことである。

（文責：編集委員 瀧口信二）

## ○「旧陸軍被服支廠の活用策を探る広島県の動き」報告その6

広島県は有識者による安全対策・価値調査等検討会議を開き、被服支廠の耐震化の実施設計や国の重要文化財指定に向けた歴史的価値の調査の検討を行っている。それと並行して被服支廠の活用策を考える有識者懇談会を開き、今年3月末までに活用策の方向性をまとめる。

有識者検討会議は昨年10月に第2回目が開かれ、主に4つの特質から被服支廠の歴史的・文化財的価値の整理を進めることを確認。(1)旧日本陸軍軍事施設、(2)倉庫建築、(3)煉瓦造及び鉄筋コンクリート造、(4)被爆遺構

有識者懇談会の方は昨年12月に第5回目が開かれ、最終報告には活用の方向性までに止めることを確認。具体的活用策は4月以降の国や市とつくる研究会で検討することになり、県の新年度当初予算には活用策が未定のため耐震補強費用は計上されていない。

### \*ワークショップメンバー：藤原美香さんのコメント\*

昨年の11月12日、全5回の県主催の被服支廠の利活用について考えるワークショップの最終回が開催された。第1回参加者は45名、しかし第4回は26名という発表があり、私は対話する熱量の強い方が残ったような気がしている。

5回全て参加し、認知度の低さを再確認できた。ワークショップ以外で、「なぜ4棟必要なのか」と、今も解体を要望している人が多くいることも実感している。

そこで私は、まずは現地に足を運んでもらうことを目標とし、そのキッカケとしてイベントの開催を考えた。県に申請すれば、敷地内でのイベントは可能なことをご存じない方も多いことから、イベント開催のお手伝いをするサポート窓口を、建築、平和、まちづくりなどに力を入れている市民団体、教育機関、県や市と連携しながら開設し



たい。周辺の町内会との連携や南区の地域起こし推進課とも密に連携していきたい。

もう一つ、達成したい目標がある。それは、「4棟の存在意義・価値を考えてもらう」という目標である。つまり、多くの人に訪れてもらうだけのイベントではなく、被服支廠がすでに持つ価値や意味も同時に考えられる内容も必要だと思っている。

しかし、このイベントは相応しくない、など開催の可否を誰が判断すれば良いのか。私は、利活用を考える際、あの場所を尊重してほしい、という考えが根底にある。主催者も、尊重した上での企画ならば誰かがジャッジしなくても良いかも知れないと考えている。

例えば、娯楽として飲食することに反対という意見があったが、始めから飲食はすべてダメ！ではなく、なぜ飲食が必要なのか、を主催者から聞ける窓口が必要だと思う。

あの場所を尊重した上での企画内容ならば、この敷地では笑うことはできない、見ただけで辛い、そんな思いをされる方にも主催者の思いを伝えることができる。

次に、どうしたら主催者があの場所を尊重してもらえるか、では、

- ① イベント企画者には事前に対面での打合せ・研修を受けてもらい、建築物としてや周辺を含む戦前からの出来事を知ることで、平和都市広島だけではない広島を感じてもらう
- ② 必ず現地での下見をしてもらうことで、主催者の一定の熱量は確保されると思う
- ③ 1カ所、必ず被服支廠の歴史を紹介するブースを設置してもらう、などを提案したい。

「このワークショップは形だけだ」など言われたが、県内外の幅広い年齢層の方との繋がり、そして県の担当の経営企画チームの繋がりが出来た。これからである。私達が関心を持ち続け、行政との協働が出来るよう関わり続けることが大事だと思う。

## □ 特別寄稿 2

### 中央図書館移転問題における隠ぺい体質

編集委員 瀧口信二

前号の特別寄稿「広島中央公園の建ぺい率問題の顛末」で、市の公園条例改正を事前に把握できなかった経緯を簡単に述べた。市がもう少しオープンに情報を公開しながら手続きを進めていけば、ひょっとして市は法律違反をしているのでは？と疑問を呈することもなかったと思う。

ところで、中央図書館移転問題を見ていると、市の職員はトップの顔色を窺い乍らしか仕事ができない状況に陥っているのではないだろうか。昨年3月に「中央図書館移転計画を考える市役所本庁職員有志」が内部告発し、移転反対の市民団体に匿名郵送した文書が読者経由で私の手元にある。その後も数通届いている。どれを読んでも真っ当なことが書かれており、その行動は評価したいが、匿名でしか発信できないところに限界がある。

職員の立場でトップに反旗を掲げることは容易なことではないが、誰が考えても常識的におかしな場合は、職員が団結し労働組合と一体となっても差し止めを市長に求めるべきではないか。

そうしなければ、市の職員も同罪であり、市民が被る不利益に対して責任を取らなければならない。市長は多数決による議会民主主義に則って進めていると強気な発言をしているが、本人もまずいと分かっているながら止められない理由は一体何なのか、明らかにすべきである。

市の第3セクター「広島駅南口開発株式会社」を救済するためなのか。経済界等からの強い要望を受けて、中央図書館を追い出してまで観客動員数のある音楽ホールを作りたいのか。

メルマガ読者であった地元建設業者の社長からエールエールA館への移転に賛成なので、配信不要のメールが届いた。その理由が、「エールエールA館も50年経てば建て替え時期が来るので、その時の世代が図書館をどうするか判断すればよい」であった。建設業界としては、取りあえず百貨店を改装して図書館にし、跡地に音楽ホールを建て、将来新たに図書館を建て替えばよいという、「事業量が増えること」「金が儲かること」を是とする本音の意見であろう。

経済界は目先の損得で判断しがちであり、そのお先棒を市長が担がされているように見える。

中央図書館の駅前百貨店への移転は明らかにミスジャッジである。開架式の閲覧がメインの区図書館程度なら百貨店を改修しても支障が少ないかもしれないが、中央図書館の場合は本来持つべ

き市民として誇らしい空間や中央図書館としての中核機能の半分ぐらいしか期待できない。

一番の問題は立地条件である。高齢者や子供たち、障害者など弱者の人たちには雑踏の中のアクセスは不安が伴うと思う。駅周辺に来た人がついでに図書館に立ち寄る数は増えるかもしれないが、図書館目当ての人は逆に減少するのではないか。

建築計画的には、図書館と百貨店のそれぞれの客や物の動線が入り混じり、図書館内の雰囲気落ち着かず、図書等の維持管理上の問題も発生する。書庫が別の階に置かれたり、バックヤードが十分に整備されないので、職員の執務環境が悪化し、職員を増やさなければ対応できない。

20年も経てば改修した図書館は劣化して建物価値が低減し、利用者や職員から不満がたまり、新たに土地を取得して建替えなければならなくなる。安物買いの銭失いの典型であり、国費が投じられていれば、会計検査院から不適切事業の指摘を受けることになるだろう。

もし市の第3セクターが問題を抱えているのならば、議会や第3者機関等でオープンに議論すべきである。経営を支援するために秘密裏に行政を歪めたり、市民の税金を投入するのは問題であり、切り捨てることも選択肢である。特に商業ビルの不動産管理等は民間の方がうまくいくのではないか。民営化には困難が伴うのかもしれないが、市の英断に期待したい。

## □ 編集後記

### めんどいまちがいさがし

私の朝の日課をご紹介します。まず新聞を広げる。天風録を読み、続いて下欄の書籍の紹介に目を通す！のだが、そこにあった「めんどいまちがいさがし」の言葉が妙に気になりずっと頭から離れない。

最近のメルマガはまちづくり事業の方向や意思決定の考え方について問題点を指摘する内容が大半となっている。しかもそのことに対する市民の無関心さについて言及する結果となっている。そもそもまちづくりとは、様々な困難が生じることが多く、いろいろな努力が必要となる。かつて計画的にまちづくりを進めるにはエネルギーが必要と主張した。

ここでそれらを再掲してみる。

- ①我慢する、②時間をかける、③協働で立ち向かう、④知恵を出し合う、⑤将来像を持ち続ける、⑥そして喜びで解決する

もう一度、ひろしまのまちづくりの「めんどいまちがいさがし」にチャレンジしようではないか。

(編集委員 前岡智之)

**\*メルマガを読まれたの感想や質問及びひろしまのまちづくりについて  
皆さんの自由な提案・意見をお聞かせください！**

(投稿は500字程度でお願いします)

### 編集委員

石丸紀興	広島諸事・地域再生研究所主宰
瀧口信二	広島アイデアコンペ実行委員会事務局
通谷 章	ガリバープロダクツ代表
前岡智之	中国セントラルコンサルタント代表